



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	科学者たちの選択 : ローマ字運動の歴史が科学技術コミュニケーションに示唆するもの
Author(s)	杉山, 滋郎
Citation	科学技術コミュニケーション, 3, 61-86
Issue Date	2008
DOI	https://doi.org/10.14943/30523
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32376
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_061-086.pdf



科学者たちの選択

～ローマ字運動の歴史が科学技術コミュニケーションに示唆するもの～

杉山滋郎

Scientists' Opting: History of the Romanization Movement and its Implication for Current Science Communication

SUGIYAMA Shigeo

Abstract

Not a few scientists did write their scientific papers in *romaji* (or Roman script) or advocated to write Japanese in *romaji* in the period between 1880s and 1940s. Other people than scientists, such as Japanese linguists, educators, politicians and businessmen, were indeed among proponents of writing in *romaji*. And those people working in different sectors in society united to carry out campaigns to promulgate among the public the use of *romaji* in writing Japanese sentences. The campaigns have been designated Romanization Movement.

Why, then, did scientists get involved in the movement? Did they have any interest specific to scientists in writing in *romaji*? Did they present any distinctive causes as scientists in the movement? The paper aims to answer these questions in taking into account the following circumstances that Japanese scientists had to meet after Meiji Restoration in 1868. Scientists generally communicate their achievements not only to the members of scientific community but also to the general public in cooperation with educators, science journalists, and others. However, when Japanese scholars started scientific research in 1870s, all members of scientific communities around the world, except those of fledgling societies in Japan, did not understand Japanese, while the general public who were to absorb scientific ideas only knew Japanese language and could use *kanji* (or Chinese character), and *kana* (or phonetic syllabic script consisting of two separate forms of *katakana* and *hiragana*), though they were troubled with *kanji*'s complexity and inconvenience. The analysis that follows explicates what happened with regard to language, terms, and script used in scientific communications between scientists, and scientists and the public in a country where native language was not English or other Western language commonly used in scientific world.

The paper also discusses what the history of the Romanization Movement implies for science communication in these days in Japan.

Keywords: Romanization Movement, Tanakadate, translation, science communication

1. はじめに

第二次世界大戦が終わってもまもなくのことである。やがてノーベル賞を受賞することになる湯川秀樹が次のように述べた。

最近におけるラジオその他の遠隔通信の諸方法の進歩は、再び話される言葉、耳で聞く言葉の優位を認めさせることになった。今後の世界においてこの傾向が益々強くなって行くだらうこ

2008年2月21日受付 2008年2月29日受理
北海道大学大学院理学院科学コミュニケーション講座
連絡先: sugiyama@hos.sci.hokudai.ac.jp

とは推察するに難くない。それに伴って世界全体に亙る普遍性を持った言葉や文字の使用が望まれるようになることも否定し得ない。その一段階としてローマ字書きが重要な意味を持つであらう(湯川 1946, 33)。

また1947年に京都で発刊されていたSAIENSUという、ローマ字で書かれた雑誌に、小堀憲、駒井卓、数内清、田村松平、その他の科学者たちが、ローマ字の論文を寄稿している¹⁾。

このように、明治のはじめ以来、自然科学者の中に日本語の文をローマ字で表記する人たちが、あるいはそうすることを支持する人たちが少なからずいた。もちろん自然科学者の中だけでなく、国語学者や教育者、政治家、実業界の人々などの中にもいた。そして、それら多様な立場の人々が協力して、日本語の文をローマ字で表記することを社会一般に浸透させるべく様々な社会的運動を展開していた(そうした運動を総称してローマ字運動という)。

しかし、科学者たちによるローマ字運動には、科学者ならではの背景や論拠があった。それを明らかにすること、ならびに、そこで議論されたことの多くが今日の科学技術コミュニケーションに対して示唆するものについて指摘すること、これらが本稿の目的である²⁾。

ローマ字運動の歴史については、これまで、国語国字問題の歴史の一側面として国語学者たちによって論じられる(平井 1948, 山本 1965 など)か、またはローマ字主義者たちによって「運動史」として論じられる(橘田 1992 など)ことがほとんどであった。しかし、前者においては科学者たちの発言・行動に十分な考察が向けられていないし、後者においては運動内部の対立・抗争が重視され、ローマ字運動全体をより広い文脈で考察しようとする姿勢が希薄であった。

また、科学史学ではこれまで、幕末から明治期にかけての、自然科学上の「訳語」の問題が主に詳しく研究され(橋本 1976, 辻哲夫 1977, 菅原・板倉 1990, 荒川 1997など)、「訳語」を手掛かりに、明治になってどっと流入してきた西欧近代科学と江戸期の学問的蓄積との連続性・非連続性、あるいは、日本と中国、日本と欧米の間での学術交流の様相が考究されてきた。他方、日本史学の分野では、近年、「国語」の問題が盛んに論じられている(長志 1995, 高木 1997 など)。「国語」という観念の誕生・成長が、帝国日本の成立・膨張との関係で論じられているのである。これは、従来、国語学史という文脈で論じられてきた問題を、より広い文脈の中に引きずり出そうとするものである。

本稿は、これら先行研究との比較で言えば、これまでよりも広いパースペクティブのもとに——科学史学での「訳語」についての研究、ならびに日本史学での「国語」をめぐる近年の研究とも接点をもつような形で——、ローマ字運動の歴史について、国語国字問題の歴史あるいはローマ字運動史という枠組を超え、ローマ字運動の中での特に科学者たちの言動を中心にして、そしてまた科学技術コミュニケーションに対して示唆することに留意しつつ、考察しようとするものである。そして科学者たちの言動について詳細に検討するために、これまで資料として活用されてこなかった「田中館愛橘資料」³⁾を存分に活用する。

2. 選択肢の出現 ～明治のはじめ～

2.1 言語の選択肢

外国との門戸がまさに大きく開かれようとしていた幕末、そして現実に門戸が開かれ外国の文物がどっとなだれ込んできた明治のはじめには、のちに国語国字問題と総称されることになる問題群に対し、様々な意見が飛び交った。

1873年、公使としてアメリカにいた森有礼は、日本も、商業世界で広く流通している英語を通商語として採用すべきである、と主張した。

われわれの言語は、漢字[Chinese]の助けなくしては、教えることもできなければ、コミュニケーションの用途に用いることもできない。このように、われわれの言語は貧弱である。・・・英語を話す人たちの商業力は、今や世界を支配するまでになっており、われわれも、商業のやり方や商習慣をいくらかなりとも学ばなければならない。だから、われわれは英語を学ばざるをえないのである。世界の中で独立を維持するためには、英語がぜひとも必要なのである。このような状況ゆえ、われわれの列島の外では決して用いられることのない、われわれの貧しい言語は、英語の支配に服すべき運命を定められている。とりわけ蒸気や電気の力がこの国にあまねくひろがりつつある時代にはそうである。知識の追求に余念のないわれわれ知的民族は、西洋の科学、芸術、宗教という貴重な宝庫から重要な真理を獲得しようと努力するにあたって、脆弱で不確実なコミュニケーション媒体に頼ることはできない。日本の言語によっては国家の法律を決して保持することができない。あらゆる理由が、その使用を止めるべきことを示唆している(MORI 1873, 266)⁴⁾。

森のこの主張に対しては、のちに自由民権運動家として活躍する馬場辰猪が反論した。馬場は、日本語が英語に比べ貧弱な言語であるという森の主張を否定し、さらに、英語を唯一の公的言語として採用すれば、英語を話すことのできる人たちとそうでない人たちの間に壁ができてしまう、という点に注意を促した。

富裕階級の国民は、貧しい国民層がたえず拘束されている日常の仕事から解放されていますから、その結果、前者は後者より多くの時間を言語の学習にあてることができます。もし国事が、さらに社会すべてが英語で行われることになれば、下層階級は国全体にかかわる重要問題から閉め出されるでしょう。それは、古代ローマの貴族が*jussacrum* (神法)、*comitia* (民会)等から平民を排斥したのと同じことなのです(BABA 1873, 213)。

この森有礼と馬場辰猪の論争にみられるように、明治のはじめには、英語を採るべきか否かという、言語のレベルでの対立があった(第4節にある表1を参照されたい)。

2.2 文字と述語の選択肢

英語などの外国語を採るか採らないかという言語のレベルを離れても、なお多くの対立点があった。わが国の郵便制度の祖ともいわれる前島密が、1873年に、「興国文廃漢字議」(国文を興し漢字を廃するの議)という一文を書いている。

臣等竊^{ひそか}ニ欧米諸邦今日ノ盛ヲ致スノ源ヲ究ムルニ百般ノ事物一トシテ理ニ原カサルナク其理ヲ究ムルヤ必^{かならず}學ニ由ラサルナク其學ニ由ルヤ必^{その}自^{がく}國ノ言語文章ト音符文字トに籍テ之ヲ修メサルモノナシ^{けだし} 蓋言語ハ其國水土ノ天然ニ出テ各人既ニ之ヲ極^{そのくにすいど}練^す中ニ習熟スルカ故ニ其之ヲ學フヤ易シ 音符文字ハ其數僅ニ限アリ 而シテヨク無限ノ事物ヲ寫^{きょうほう}スカ故ニ其之ヲ用フルヤ便ナリ(前島 1873, 51)⁵⁾

前島は、森有礼とは違って、新しい言語を導入しようとは言わない。ただ、日本語の文を表記するのに、漢字ではなく、音符文字としての仮名を使うべきだという。漢字は習得するのが大変、使用にあたっては煩雑であるなど、弊害が多い。それにひきかえ、ひらがなとカタカナは、習得も利用も容易であり、したがって「年十五歳ニ至ラハオノ優劣ヲ問ハス地理天文窮理歴史等普通ノ諸課ハ概シテ

卒業」(前島 1873, 57)できる。仮名で表記できないものはないし、同音異義語も前後の文脈から十分に区別がつく。前島はこのように言う。

仮名を用いて表記される術語(用語)については、次のように言う。

國語ヲ修ムルハ其學^{まな}ヒ易ク用ヒ易クシテ人生有用ノ實學ヲ興サンカ為メナリ 僻^{へき}古家ノ所謂^{いわゆる}國体ヲ正シ名義ヲ明ニスルノ論アラス 又枕詞^{まくらことば}對句^{たいく}ノ浮華ヲ取ルニアラス 故ニ普通一般ノ語ヲ用フ 古語ニ泥マス 又俚語^{りご}ニ偏セス且漢語ノ如キハ中世以来我カ普通ノ國語タルモノ多シ 又近世事物ノ新出スルニ随ヒ欧語ノ我ニ行ハル、モノ少カラス亦之ヲ棄テス (前島 1873, 59)

要するに、用語は実用性を第一に考えて「普通一般ノ語」を用いるが、場合によっては漢語でも外来語でも採用しようというのである。

西周のように、「愚暗ノ堅軍ヲ破摧^{はさい}」し日本の近代化を推進するにはabc26文字の「洋字ヲ以テ和語ヲ書ス」べきだ、と主張する者もあった(西 1874, 62-73)。ヨーロッパの習俗、衣食、法律、「其他百工學術ニ至ルマテ彼ニ採ルニ向ハサル者莫シ」だから、文字もいっしょに採り入れればよいというのである⁶⁾。ローマ字で表記すれば容易に「國語」の読み書きができるようになるし、「洋算法」とともに横書きできるなど、10の利点を挙げて自説を主張している。

ローマ字表記を主張した西周は、「漢學ノ如キ我國ニ在テ猶洋ノ拉丁ノ如シ」(西 1874, 68)と、漢語の術語を使うことに否定的である。その一方で、「翻譯中學 術上ノ語ノ如キハ今ノ字音ヲ用フカ如ク譯セシテ用フヘシ 又器械名物等ニ至テハ強テ譯字ヲ下サス原字ニテ用フヘシ」(西 1874, 67)と、外国語の音をそのまま表記して外来語とすることや、あるいは外国語の単語そのままを用いることにさえ、寛容である。

しかしながら、かな論やローマ字論があったとはいえ、大勢は漢字仮名混じり文を支持するものであった。西周自身も、「近日此書[明六雑誌]ノ如ク片假名交リノ文頗^{すこぶる}一定ノ文體トナル」(西 1874, 68)と言うほどである。漢字仮名混じり文においては、用いられる術語は漢語である。

ただし、漢字の字数の節減を強く主張する人たちがいた。たとえば福沢諭吉は、「ムツカシキ字漢字ヲ成ル丈用ヒザルヤウ心掛ル」(福沢 1873, 46)ことを訴え、1874年に著わした小学校用国語教科書『文字之教』でそれを実践した。『訓蒙究理図解』などの科学啓蒙書も、少数のやさしい漢字を使った漢字仮名混じり文で書いた。

以上のように、明治のごくはじめの時点ですでに、言語に加え、術語と文字の面においても意見の対立が表面化していたのである。

3. 科学者たちも発言を始める

やがて1880年代に入ると、次第に組織的な運動が立ち現われてくる。1883年7月に「かなのくわい」が組織された。しばらく前に誕生していた「かなのとも」「いろはくわい」「いろはぶんくわい」「いつらの音」などが大同団結してできたのである。かな遣いなどをめぐって内部に対立を含んでいたが、それでも、1888年末には会員数が5000人余りに達した。ローマ字のほうでも、1886年1月に「羅馬字会」が創立された。会員数は1887年の時点で7000人弱にのぼった(平井 1948, 181-6)。

そしてこの時期は、東京大学もすでに創立され、「科学者」たちの言動が明確な形をとり始めたころでもあった。彼らは、上に述べた言語・術語・文字の問題にも関心を寄せ、科学の研究あるいは科学の教育・普及との関連で具体的な発言や活動をするようになった。実際、「かなのくわい」のメンバーには、外山正一、近藤真琴、後藤牧太、三宅米吉、清水卯三郎など、羅馬字会のメンバーには、外山正一、

矢田部良吉, 山川健次郎, 北尾次郎, 寺尾壽, 松井直吉, 隈本有尚, 後藤牧太, 桜井錠二, 松井直吉, 箕作佳吉, 高松豊吉など, 科学史上に名を残している人たちの名前が登場する(平井 1948, 182-7)⁷⁾。

そこでこんどは, 彼ら科学者たちが, 上記の問題に対しどのような議論を展開したのか見ていこう。

科学者たちは, 森有礼が「英語採用論」を言うときに想定した「通商に携わる人たち」と同様に, いやそれ以上に, 外国語(英語)が必要である。外国の論文を日常的に読む必要に迫られ, また国際的な科学者共同体にむけて研究成果を発表していく必要があるからである。しかも当時の科学者の大部分は, お雇い外国人によって外国語(多くは英語)で教育を受けていたのだから, 英語を科学界の公用語とする, という選択はきわめて現実的なものでありえた。

しかし科学者たちは, 外国語(英語)を導入し日本語を放棄してしまおう, とまでは主張しなかった。「漢字を廃し英語を熾に興すは今日の急務なり」(外山 1884a)を著わした外山正一も, 漢字を廃してローマ字で日本語を表記することと, 西洋語(特に英語)を学ぶことを主張したにすぎない。日本における科学の研究や教育を, すべて英語で行なうべきだ, と主張しているわけではない。

科学者たちが, 科学の研究・教育を英語で行なおうと考えなかった最大の理由は, 当時の科学者たちが, 欧米の科学知識を自分たちが学ぶことに関心を寄せていただけでなく, 科学知識を一般庶民に啓蒙普及することにも多大の関心を払っていたからである。国民全体が一丸となって西欧の近代科学を吸収し, 西欧に追いつかなければならないと考える当時の科学者たちにとって, 科学知識の普及啓蒙にも関心を払うことは当然であった。そして, 国民全般への知識の普及啓蒙ということを考えれば, 通商の場合とは違って, 外国語(英語)を採用するという途はまず採りえない。

ところで, 先に述べた森有礼と馬場辰猪の対立について萩原延壽は, 「森は[英語の採用による]国際的な利益を優先させ, 馬場は国内的な影響を憂慮した」(萩原 1967, 42)⁸⁾と指摘している。これにならって言えば, 当時の日本の科学者たちは「国内的な」「利益」を重視して, すなわち国民各層への科学知識の普及啓蒙という面を重視して, 英語の採用という途を採らなかった, ということができる。そのおかげで, 馬場辰猪が危惧したような, 「上層階級と下層階級は完全に分離し, 両階級のあいだには共通する感情がなくなってしまう」(馬場 1987, 213)⁹⁾という事態が回避された。

このことの意義は大きい。インドのように, 科学技術の教育が基本的に宗主国の言語で行なわれた場合と比較してみればよい¹⁰⁾。日本においては, 科学の専門家と一般大衆との間に, 言語的な障壁ができなかった。誰でも日本語で科学を学ぶことができたし, 科学論文も日本語で読むことができた。科学についてわからないことは, 日本語で科学者に問い質すことができる。こうして, 科学知識は急速に国民の各層に浸透していき, 優秀な労働力を産み出した。そしてこの優秀な労働力が, 明治以降の日本の急成長を支えたのである¹¹⁾。

しかしこのことは反面, 「国際的な」「影響」を大きくしてしまった。科学の世界は国際的であり, 外に向かって発表していく必要がある。しかし, 日本の科学者たちは, 日本語で不自由なく科学論文を書くことができるために, そして日本語を用いる科学者の共同体が急速に形成されていったがために, 「日本語で閉じた科学者共同体」の内部で科学を営むようになっていった。そしてそれにつれ, 学術の国際的交流という面で言語的に高い障壁を感じるようになっていった。1980年代ごろから「科学技術の国際化」が声だかに叫ばれるようになるという事態は, こうした歴史的な文脈の中に位置づけて考えることができる。

ところで, 日本語で科学を営もうとすれば, 外国語で表現された自然科学上の諸観念を日本語(の術語)に置き換える必要が出てくる。専門用語を日本語に翻訳する作業が必要なのである。

術語の翻訳については, 江戸時代からの蓄積があった。蘭学者たちによって, 自然科学上の基本的な概念のかなりの部分が, 漢語に置き換えられていたのである。しかし, それらの訳語は学者間で標

準化されていたわけではないし、明治になってから新たに流入してきた大量の科学概念に対しても訳語を定める必要があった。というわけで、明治時代の初めにいくつかの学問分野で訳語会が作られ、そこでの検討結果が雑誌などを通して公表された。

こうして定められていった術語は漢語であり、したがって漢字で表記された。しかし、科学者の中には、専門用語を漢字で表記することへの反対意見があった。読み書きの難しい漢字を用いることは、科学知識の修得・普及に大きな障碍となるからである。

たとえば松村任三は、自らの研究分野である植物学を例に、次のように述べている。

何故ニ植物ノ漢名ヲ用フルヤ。植物ノ名ヲ記スルニハ仮名トイフ便利ナ文字モアレバ、ローマ字トイフ尚ホ便利ナルモノモアリテ、*Coliaria japonica* A. Gray ハ仮名デカケバどくうつぎ、ローマ字デハ *Dokuutsugi*, 植物名ヲ仮名或ハローマ字ニテ書ケバ誰ニモ分り易ク、之ヲ書ク人モ読ム人モ少シノ困却ナシ(松村 1889)¹²⁾

彼はすでに、植物学の述語をローマ字と漢字で対訳にした『植物学語抄』(松村 1886)を出していた。難しい漢字が頻出する植物学においては、ローマ字ないし仮名への期待が高かったものと思われる。当時の植物学は在野のアマチュアたちに依拠する(依拠しう)部分が多かったことも、難解な漢名を避けるよう促す要因であったかもしれない¹³⁾。

かな論者は、当然のことながら、著作の全体を漢字を用いずにながだけで著わそうとする。その際、漢字で書かれた漢語の専門用語(の音)をかなで表記するというだけでは飽き足らず、かな書きに適した術語(和語)を新たに創出しようとする人たちもいた。未だ術語が確定しきっていないという時代状況を有利に使おうとしたのである。先の松村任三も、主根をオヤネ、甸甸茎をハイグキ、中肋をナカスジ、花冠をハナカムリ、両性花をメオゾロイ、雌雄同株をヒトキノハナなどと表現した(木原・篠遠・磯野 1988, 181)。彼は、大学の講義でも、こうした和語の術語を使っていたようである¹⁴⁾。

清水卯三郎は、Thomas Tait の化学書をもとに『ものわりのはしご』という、全文ひらがなの化学入門書を著わした¹⁵⁾。その書で清水は、化学用語について、覚え易くわかり易いということを第一に考え、「なるたけ わが くに の ことば を もて あてはめた」。元素は「おほね」、空気は「ほのけ」、酸素は「すいね」、炭酸は「すみ の す」、単体は「ひとへ の もの」、化合物は「いやへ の もの」といった具合である。

しかしこれらは、すでに蘭学者たちが使っていた漢語の術語、あるいは訳語会が次々に制定しつつあった漢語の術語と違うものであった。また、「いまからみるといかにもおちつきがわるい」(イ・ヨンスク 1996, 35)という印象を拭いえない。もちろん、当時の人がどういう印象をもったかは別である。この点についての直接的な証拠は持ち合わせていないが、田中館愛橘の次のような発言が一つの示唆を与えてくれる。彼はまず、

西洋の辞にて学ひたることゝ[自然科学]を書きて載せんとするには、まずは訳語を考出し、それからこれにあたる漢字を考出してこれを用いねばならず、これには迂生大いに困難す、諸君もこれを読むに困難せらるるならん(田中館 1885, 3)

という。日本語に翻訳された自然科学の書物を読んでも、「単当振子、微分検温器、などの字を書きたる処に至ればちょっと読み止まり、ハハーソーカ、彼のことか此のことかなどと文の後先の意味から押し斗りてようやく読み通す」という状態である。かといって、「はやさ」や「引き」などと「純粹にして分り易き日本語を遣いてもあたりから目立って、かえって読み悪く分り悪い。漢字で表記される

漢語では具合が悪いし、かといって、(かなで表記される)和語も具合が悪い、というのである(田中館 1885, 3)。こうして田中館自身は、ローマ字表記を主張する。

ローマ字論者の中には、外国語の術語をその原綴りのまま(いかなる翻訳もすることなく、たとえば electricity と)日本文の中に書き込むことを、先の西周のように許容する人もいたし、外山正一や矢田部良吉のように、それをローマ字表記の利点として挙げる人たちもいた。たとえば植物学者の矢田部は、「羅馬字ハ、方今文明諸国ノ共通スル所ニシテ・・・此ヲ取テ日本語ヲ綴ルトキハ、後來我文字ノ、文明世界ニ普及スルノ便ヲ得ルノミナラス、近來盛ニ西洋ヨリ移シ來ル、諸學術上ノ語ヲ翻譯スル如キ、難事ヲモ避ルコトヲ得ヘシ・・・」という(矢田部 1882, 94)。

だが、やがてローマ字運動の中で指導的な位置についていく田中館愛橘は、「数学の式を書き、表を作る等、我々理学を修むる者に取りては一層便利あるべし」(田中館 1885, 4)など、ローマ字表記の利点をいくつか挙げているが、翻訳をなしで済ますことができるという点は挙げていない。現実にも、外国語の術語をそのまま日本文の中に書くという流儀は一般化しなかった。何らかの形で原語の意味を汲んで、日本語に置き換えようとしたのである。

しかしそうすると、漢字を使わないでどのようにして専門用語を造語していくか、という厄介な問題が出てくる。かな文字論者のように、和語の術語を創造し、それをローマ字で表記する、というのが一つの方法である。しかし、色の濃淡はあれ欧化主義を背景にもつ当時のローマ字論者にとって、これは採りえない選択肢であった。残るは、(漢字を用いた)漢語を想定し、その読みをローマ字で表記する、という途である。

だが、これはある意味で、ローマ字論の敗北への一步であった。漢字を背景にもつ術語(漢語)を使っている限り、漢字との縁が切れず、人々の意識や生活の中に根づいている漢字が再び興隆してくるのを抑えることができないからである。この点に関して外山正一は、鋭くも次のように指摘していた。

漢字を用ふればこそ漢語は益々増加すべけれ仮名若くは羅馬字を用ひんには、我國の語は其字を以て表するに都合よき者に次第に変遷して益々之を以て表すことの出来がたき漢語は漸々に跡を絶つに至らんこと何より見易きの理なり(外山 1884a, 75)

まずローマ字表記にしておもう、ローマ字表記にふさわしい術語は、それに応じて出てくるに違いない、というのである。

しかし、時はすでに遅すぎた。蘭学者たちによって、科学上の漢語がすでにかなり作られ、流布していたし、明治に入ってから、大勢は漢字カナ混じり文で、漢語の専門用語がどんどん追加されつつあった。こうした趨勢の中では、ローマ字論者も漢語の術語をローマ字表記するしか、現実にはとる途がなかったであろう。

第二次大戦後にローマ字論を支持した湯川秀樹の次のような発言にも、ローマ字論のここでの敗北が尾を引いていると言えよう。

吾々が今直ぐ日本語を全部ローマ字書きにした場合に起る種々の不便は充分豫想できる。・・・一番問題となるのは漢字や假名を忘れてしまったために新しい單語を造り出す源泉が枯渇し、日本語が固定し貧弱になる危険性である。この點に關して私は次のやうに考へる。

欧米において新しい術語を造る際にはギリシヤ・ラテンの語根が利用されるのが常例である。ギリシヤ語やラテン語自身は知識階級が教養として修得する古典語であるが、こゝに現代語の不斷の源泉が求められるのである。これと同じやうに將來一般國民の使ふ日本語がローマ字で

書かれる時が来ても、漢字や假名や又それ等によって表現される伝統的な國語は知識階級の教養として存続するであらう。そしてそこから日常の日本語を豊富にし、それが低級言語化するのを防ぐに必要な栄養分が供給されねばならぬであらう(湯川 1946, 33)。

また、科学の専門用語が漢字の造語力を活かしながら漢語として次々に創作されてきたおかげで、日本語で科学を営むことが可能にされてきた、そして科学知識の教育・普及が促進されてきた、ということも否定できない¹⁶⁾。その意味で、吉田富三の次のような発言も認めざるをえない。

漢字によって、あるいは漢字によってのみ、正しく表現されるやうな日本語の語彙が、・・・沢山生まれて来た。・・・私は日本語とその成長をこのやうに観て、この独自の国語創作に民族的経験こそが、日本人が過去数百年ないし百数十年の間に世界に示した、あのすさまじい西歐文物の吸収と消化の頭脳の原動力だったと考えてゐる。表記や発言の便不便を越えた、日本語のエネルギーといつてもよい。従つて、漢字が科学技術の導入と普及向上に障碍であつたと断定するのは、私見では、見当違ひといふことになる(吉田 1992, 184-5)。

漢語の術語は、同音異義語の問題としてもローマ字論者を悩ました。「はし」(橋, 端, 箸)などの同音異義語について、明治はじめのローマ字論者たちは、「前後の文脈からわかる」「英語にも同音異義語がある[が支障は起きていない]」といった、いわば消極的な反論で防戦していた。ところが、1920年代の(日本式)ローマ字論者たちは、もっと積極的に、「日本語の正当な発達を助けること」によって克服していこうとする。

たとえば田丸卓郎は、音を聞いただけで区別のつかない言葉があるというのは「日本語其物の欠点」である、むしろローマ字を積極的に使うことにより、そのような「不完全な語を淘汰」し、「日本語の健全な発達を促す」べきである。そのために、むやみに漢語を使うことも止めるべきだ、と主張した(田丸 1914, 69-70)。そして、日本語に対するこの種の改善を、ローマ字論者たちは「ことば直し」あるいは「国語の整理」と呼んだ(田中館愛橘資料 No.1766; 田丸 1914, 71)。

田丸は、それを実際に試みてもいる。彼のローマ字書きの力学書 *RIKIGAKU* (田丸 1937a) を見ると、Otoroeru Sindô, Siirareta Sindô, Sitten-kumiai, Osihirometa-Zahyô といった術語が出てくる。これらは、当時の『理化学辞典』(石原 1935)にそれぞれ減衰振動、強制振動、質点系、一般化座標として出てくる用語である。つまり田丸は、当時慣用されていた術語を、先のように変更しようとしたのである¹⁷⁾。

明治のはじめに外山正一の指摘していたことが、この時期になってようやく実際に試みられたとも言える。しかし、これは余りにも遅れてやってきた「ことば直し」であり、一般に広まることはなかった¹⁸⁾。

1890年代に入る頃から、仮名運動もローマ字運動も急速に衰退し、羅馬字会は1892年には活動を停止してしまつた。その要因としては、運動組織内部での混乱という内在的要因のほか、民権運動が弾圧され欧化主義への反動期がやってきたという外在的要因も挙げられている。当時の仮名運動とローマ字運動は、ともに自由民権運動の一形態として発展してきていたし、欧化主義とも(とりわけローマ字運動は)結びついていたから、というのである(平井 1948, 194-6)。両者の運動を衰退させた要因には、文体の問題もあった。ローマ字論者の書く文章は漢文訓読体をそのままローマ字にうつし変えたものであつたし、かな文字論者の文章は「なりけり」式の擬古文調がほとんどで、言文一致運動の高まりという形で顕在化しつつあつた「文体」の問題で遅れをとっていたのである(平井

1948, 200; イ・ヨンスク 1996, 38-39).

ともあれ、仮名運動もローマ字運動も、1890年代に入る頃から衰退する。しかしその一方で、ローマ字運動が物理学者たちの中に橋頭堡を築いていたというのも事実である。田中館の主張は、物理学者たちの間に支持者を増やし、その結果、東京数学物理学会(今日の日本数学会、日本物理学会の前身)の機関誌『東京数学物理学会記事』も第3巻からは *TŌKYŌ SŪ GAKU BUTSURIGAKUKWAI KIJJI* と表題を改め、記事も論文もローマ字で書かれるようになった。

4. ローマ字運動の再興：ヘボン式 vs. 日本式

1890年代に入って衰退したローマ字運動であるが、1900年前後から再び勢いを盛り返しはじめる。その背景には、次のような一連の動向があった。日清戦争後、「日本人が支那の文字を用ふる間は、多少支那の文字から支配を受けて行かねばならぬ、それが実にいやな事」(井上 1894, 111)といった感情をもとに「新国字論」が台頭する。その動きをうけて帝国教育会内に国字改良部が設置され(1899年)、文部省内にも1902年に「文字ハ音韻文字(フォノグラム)ヲ採用スル事トシ假名羅馬字等ノ得失ヲ調査スルコト」などを目的とする国語調査会が設置され、仮名論者やローマ字論者が参画した。これら一連の動きが、ローマ字運動(ならびに仮名運動)の再興にとって追い風になったのである(平井 1948, 211-20)。

1905年12月7日、「日本語をローマ字で書くことを擴める」ことを目的とするローマ字ひろめ会(当初は「ローマ字擴め会」)が設立され、機関誌 *Romaji* を発刊した¹⁹⁾。そして、小学生にローマ字で日本語を綴ることを教えるよう、文部大臣に建議するなどの活動を開始した。1907年3月には、東京市長の尾崎行雄が、このローマ字ひろめ会の建議を承けて、上野公園で東京博覧会が開かれるのを機会に町名をローマ字と漢字で記した町名札を全市の辻々に立てるということもあった。

ただ、この再興したローマ字運動においては、ヘボン式ローマ字を主張するものと日本式ローマ字を主張する者との対立(主義主張だけでなく組織面でも)という新しい局面が加わる。ローマ字ひろめ会が誕生した直後、1905年12月25日に、当時、東京帝国大学理科大学の物理学助教授であった田丸卓郎が、物理学教室のニュートン祭でローマ字論を発表し、「日本式ローマ字」を主張していた²⁰⁾。ローマ字ひろめ会は、ローマ字論者が大同団結する組織であり、機関誌 *Romaji* でも当初はいろいろな綴り方を許容し、田丸卓郎も加わっていた。しかし、ローマ字ひろめ会が、1908年5月にヘボン式を公式の綴り方と定めたのを機に、田丸ら日本式を主張する者たちが次第に別の組織を中心に活動するようになっていった²¹⁾。こうして、ヘボン式と日本式との対立が、抜き差しならぬものになったのである。両派はそれぞれに自分たちの方式を国民各層に普及するための運動を展開し、政府への働きかけなども行なった。

明治のはじめ：選択肢の出現
日本語か英語か
漢字(仮名混じり)か、仮名(カタカナ、ひらがな)か、ローマ字か
1880年代：科学者たちも発言を始める
日本語を採る
術語を、漢語にするか、和語にするか
漢字仮名混じり文か、仮名文か、ローマ字文か
1900年代：ローマ字運動の再興
ヘボン式か、日本式か

表1：主要な論点の推移

もっとも、両派の対立の芽はすでに1880年代からあった。1885年に羅馬字会がいわゆるヘボン式の綴り方を会の公式の綴り方と決定したのに寺尾壽や田中館愛橘らが異をととなえ、田中館が「本会雑誌ヲ羅馬字ニテ発兌スルノ發議及ビ羅馬字用法意見」などで反論するとともに、*Romazi Sinsi* を別に発行する、といった事件があったのである(田中館 1885, 105-32; 平井 1948, 184-94)。しかし、ローマ字運動全体の衰退ということもあって、決定的な対立までには至らなかった。

さて、ヘボン式と日本式との対立が激しさを増した時期は、反面、ローマ字運動が高揚した時期でもあった。ローマ字の普及をめざす組織が、ローマ字ひろめ会や日本のローマ字社のほかにも、各地にできた。たとえば、土岐善磨が中心になって東京に東京ローマ字会が設立され(1914年)、大阪にはヘボン式を推進する団体の帝国ローマ字クラブが設立された(1921年)²²⁾。ロサンゼルスに日本のローマ字社の支社ができ(1914年)、台湾にも台湾ローマ字会が誕生した(1920年)。

各種のローマ字の図書や雑誌の刊行も活発であった。1918年に、日本のローマ字社から少年少女向けの月刊雑誌『ローマ字少年』が発刊され、*Taisyō 8-nendo no Rōmazi Kaityū-nikki* も売り出された。日本のローマ字社は、*Romazi no Uta* (田中館愛橘作詞、緒方準一作曲)を発表し(1920年)、土岐善磨考案のローマ字浴衣を売り出した。

こうしたローマ字運動の高揚により、大学の卒業論文をローマ字で書く者が現われた(前掲 1994, 114)し、仁丹のように新聞にローマ字の広告を出す会社も現われ始めた。1920年の春の衆議院議員選挙では、ローマ字による投票が出現し、1924年4月に内務省が選挙でのローマ字投票は有効と告示するまでになった。石川啄木が有名なローマ字日記を書いたのは、1909年、1911年のことであった。

科学者の中には、実際にローマ字で著作を発表する人たちも出てきた。桜根(1913)、寺田(1913)、池野(1913)、末松(1925)などである。

5. ローマ字と自然科学者

この時期にローマ字書きを支持した人たちは、どのような理由からそれを支持したのであろうか。まず目につくのは、教育を効率化するために、というものである。たとえば田中館は、次のように言う。

「蒸気機関」がどんなものであるかといふことは、今日の生活に必要欠くべからざる知識である。然もこの「蒸気機関」といふ文字はなかなかむづかしい。このむづかしい文字を学んだところで、それは「蒸気機関」を学んだことにはならない。風呂敷をいぢくったところで、中身はわからないのである。この忙しい世の中に、風呂敷を調べるために暇がかかって、最も大切な中身を研究する暇がないといったら、これほど馬鹿げたことはないではないか(田中館 1920, 70)。

しかし、この限りでは、1880年代にもすでに出ていた議論である。が20世紀に入ってから「教育の経済」²³⁾の主張は、「国力の増進」と結びつけてなされる。しかも、その結びつけが、時代とともに強まっていき、かつ戦争の血生臭さが漂い始める。日清・日露の二つの戦争に勝利して自信を深めた日本は、「欧米に追いつくために」という段階を脱し、「欧米に勝つために」と考え始めた。そうした世相が、科学者たちの発言にも現われてくる。たとえば田丸卓郎は次のように言う。

今の世の中は世界各国国民の実力の競争の世の中である。正味のある学問をすることの競争、その学問を応用して国力を増進することの競争に敗れるものは滅びるよりも外に仕方がない。我々が無意味な風呂敷の詮索をして居る間に、外国人は中味の学問をしてそれを応用することに日も足らない有様である。こんなことで我々が外国人に対して競争ができるだろうか。・・・先年日本を視察に来た米国の実業家が向ふへ帰っての報告の中で「日本が漢字を使って居るうちには恐れるに足りない」と云ったさうだが、実際それに相違ない(田丸 1914, 4-5)。

この時期のローマ字論に見られる第二の特徴は、新しく出現した機器であるタイプライター(電信の印字機としてのタイプライターも含む)への言及が加わったことである²⁴⁾。たとえば田丸は、商

売を営む人にとってのローマ字のメリットを、タイプライターと結びつけて次のように指摘する。「ローマ字であればタイプライターと一人の技術者を使って、同時に必要だけの写しを作りつつ、口述すると同じほどの早さで、いくらも往復の書付けをすることができるが、漢字ではこれができない。」(田丸 1914, 72-3)

丸善が日本でタイプライターを初めて発売したのは1900年のことである。1917年にはアメリカ製コロナ携帯用タイプライターが輸入された。その後1921年には、田中館愛橘・田丸卓郎らによって考案されたローマ字文用タイプライター Nipponnsiki-Korona の市販が始まった²⁵⁾。

ローマ字主義の科学者たちはタイプライターを愛用した。たとえば寺田寅彦は1916年12月13日に、田中館に次のように書き送っている。

・・・はなはだ失礼だとは思いましたが、試みに、寝床の中で Typewriter を叩いてみました。もとより、あまり具合のよいものではありませんが、しかし万年筆で書くよりはずっと楽でございます。ただ、CapitalとFigureとのキーを押すのが少し都合が悪いようでございます(寺田 1916)。

田中館もタイプライターを愛用した。たとえば、1926年10月に姫路ローマ字会ならびに大阪の甲南高等学校でローマ字について講演したあと、大阪から東京に帰る汽車中で、姫路ローマ字会の世話人に宛ててタイプライターで手紙を書いている(田中館 1926b)。国際会議で海外に出かけた時もタイプライターを愛用した。

田中館はさらに、ほかの人たちにもタイプライターの導入を積極的に勧めた。姫路ローマ字会の世話人に宛てた先の手紙の中で、次のように書いている。

ついでながら、姫路ローマ字会でも日本式コロナを一台お備えになってはどうでございます？ お望みしだいで、代価は適当な月賦でお払いしていただくように取り計らいます。ひとつ、御相談を願います(田中館 1926b)。

田中館はまた、車中で書いた先の手紙の中で、大阪での講演のあと朝日新聞の記者からタイプライターの注文を受けたことを紹介し、「いかに世間がローマ字運動に真面目になったかを証拠立てます」と書いている。別の機会に田中館は、ローマ字はもはや実用の時代になっているとも述べている。その根拠は、日本式コロナがどんどん使われるようになっている、ということであった(田中館 1926a)。このように、当時、タイプライターは、ローマ字と密接に関係した機器であった。

なお、軍部の中にもローマ字に関心を示す人たちがいた。そして、迅速な連絡(作戦命令など)にタイプライターや電信を使おうとして、ローマ字を研究する人たちが田中館に助言を求め、田中館もそれに協力した(田中館愛橘資料 Nos.1759, 1762, 1769, 1971など)。

ローマ字を支持する上記二つの理由は、科学者に固有の利害関心を反映しているものではない。しかし、次の第三の理由は、科学者の営みと密接に関係したものである。それは、国際的な学術交流のためにローマ字を、というものである²⁶⁾。

田丸卓郎は、「我々理学者は絶えず外国の同業者と、書いたもので接して居るから、国語の現在の書き方の為に不利益を蒙ることを常に感ずる」、だから国語学者でもないのに国字問題に手を染めるのだと言う(田丸 1914, 2)。科学研究の成果を海外に向けて発表していくうえで、日本語(の表記)が大きな障害だったのである。こうして、日本人による科学研究の成果を海外に流通させるには論文のローマ字表記が必須である、と主張されるようになる。1926年の秋に東京で第3回汎太平洋学術会

議が開催された。海外から広範囲の学問分野にわたって多数の参加者を迎えて行なわれた国際会議としては、わが国で初めてのものである(湯浅 1961, 249)。

この会議が終わったあとで、田中館は次のように語っている。

吾々が震災予防調査会を設けて以来、其の報告は各種を併すれば二百巻以上もある。それを英語で書けというても、やり切れるものでない。併し自分の言葉でやれば直ぐ出来る。・・・それ故日本語で書く。但し漢字(チャイニーズ、キャラクトル)は両方で迷惑であるから羅馬字で書く。辞書を引いて御読みなさい。是からは吾々の報告は能き^でるだけ羅馬字で書くから、賛成して呉れと[その会議の折に]言ふと、皆手を打って賛成した。実際又是でなくては、日本のサイエンスも何も役に立たない(田中館 1926c, 25-6)。

1880年代の田中館は、ローマ字は先進国で広く使われている文字であるから、日本人の学説を世界に向けて発信するのに、(仮に日本語で書かれていたとしても)好都合である、と主張していた。ローマ字は、「当今文明と称する諸国に普通の文字なれば、之を以て我々の説を書き彼の国々へやりても同じ専門の人なれば之を以て書ける数式や表ぐらゐは分るなり」。「迂生は独逸や仏国の学は修めざれども一通り英吉利語が読める故、彼の国々にて出版せる暦や数表はどうやら用いるによし」というのである(田中館 1885, 4)²⁷⁾。なんとも控え目な主張である。

ところが1926年の田中館は、科学研究そのものはもちろん、その成果を表現するローマ字書きの日本語にも、はるかに大きな自信を持つようになっている。今や「日本語が世界的の国語となり、電信文の如きは勿論、外国人の論文にも簡単なる日本語の単語のみの使用に止まらなくなり、日本語に関する著作も外国人側から要求される事年々多くなるに至」(田中館 1930, 51) っているという。日本語は、性や数による動詞や形容詞の活用がないなど単純であり、言語学的にエスペラントに近い言語だという。そして、「其重要なる学問上の仕事が出来れば自然其言葉は重んぜられて通って行く」(田中館 1926d) ようになる、とさえいう²⁸⁾。

もちろん、田中館のこうした発言の背景には、日本における科学研究の水準が世界的なレベルに達し、研究成果への需要が海外からもある、という彼らの現状認識があった。また、自然科学の発展とともに、研究そのものが、研究者間、研究所間の世界的なネットワークの中ではじめて成り立つような状況に移り変わってきており、日本の科学研究も、そうした世界的なネットワークの中にますます深く入り込んできていた、という事情もある(YOSHIDA and SUGIYAMA 1997)。1899年、水沢に緯度観測所が設立されたのがその象徴である。また、第一次世界大戦のためにドイツからの専門雑誌の輸入が一時的に途絶え、そのためデータが不足してわが国で十分な研究ができない、ということが現実に起った(HIRAYAMA 1920)。科学の研究は、それほどまでに世界的な結びつきを必要とするようになっていたのである²⁹⁾。

6. 日本式ローマ字と自然科学者

ヘボン式と日本式の対立抗争は、その後どのように展開していったのだろうか。

結果的には、日本式が次第にヘボン式を圧倒していった。田中館らの強力な働きかけもあり、自然科学に関係した官庁組織で次第に日本式ローマ字を採用するところが増えていった。中央気象台が日本式ローマ字に統一(1913年)、陸軍省陸地測量部が地図の地名のローマ字書きを日本式の綴り方に統一(1917年)、海軍水路部が海図のローマ字を日本式綴り方に決定(1922年)、海軍水路部の地名は日本式ローマ字を用いることを各国に通知(1925年)、海軍省が省内でのローマ字を日本式に統一(1928年)、万国船舶信号書改訂会議(ロンドン)にて日本式ローマ字を使用することを表明(1928

年), といった具合である。

自然科学者の多くが、ヘボン式ではなく日本式のローマ字を支持した³⁰⁾。これには、当時の自然科学は全体としてみればドイツ語圏において最も進んでおり、日本の科学界もドイツとの交流が深かった、という事情が関係しているように思われる。つまり、科学者にとっては英語がすべてではなく、いわば英語を相対化しやすい状況にいた。この点、ヘボン式の支持者の多くが英語学者あるいは英語圏と密接な交流のあった人たちであることと対照的である。ヘボン式では、たとえば「チ」は“chi”と綴る。これは明らかに英語の綴字法に倣ったものである。だから、英語がすべてでなく、ドイツ語、フランス語などそれぞれにおいて綴字法が異なることを身近に知っている人にとっては、日本語には日本独自の綴り方が必要だという日本式の主張は、大きな説得力を持ったであろう³¹⁾。

日本式の支持者は、自然科学者の中でも特に物理学者に多かった。これは、当時のローマ字運動をリードした田中館愛橘も田丸卓郎もともに物理学者であったということが大きく関係しているであろう。その田丸も、1932年に没する。そして残った田中館のほうは、1930年代に入った頃から、日本式ローマ字の妥当性を言うために、しきりにヨーロッパにおける最新の言語学（音声学と音韻学）の研究成果を援用するようになった³²⁾。

たとえば、1936年4月28日に日仏会館で行なった講演「音韻学上よりみたる日本語の音声と正字法」(田中館 1936)を見てみよう。本居宣長に加え、トゥルベツコイ、グロート、小幡重一(東京帝国大学)、田口卯三郎(理化学研究所)らの研究を引きながら、まず母音および母音系統について論じていく。そして、音韻学の誕生により、文字(正字法)は音韻を表わすものと考えられるようになった、ということ強調する。

彼が言うには、かつては、ある言語における多様な音声を精密に表現するものが理想の正字法とされたが、「之等は既に過去の歴史」(田中館 1936, 76)になった。その転換を促したのは、「音韻論の創始者」(イヴィッチ 1974, 98)たるトゥルベツコイである。

トゥルベツコイは、音素とは調音音響特徴の中でコミュニケーション過程に必要とされる最小限の特徴であることを主張した。たとえば、セルボクロアチア語の固有名詞Anaにおける歯音の/n₁/と固有名詞Ankaにおける軟口蓋音の/n₂/は、音声的には異なった存在である。しかし音韻論的な意味では、これは同一の音素/n/に該当し、これが/n/である限りは、語の意味に影響を与えることはない、というのである(イヴィッチ 1974, 98)。

このことから、文字はこの意味での音素を適確に表現しさえすればいいのであって、個々の音声すべてを正確に表現する必要はない、という考え方が出てきた。そしてトゥルベツコイは、1931年にジュネーブで開かれた第2回国際言語学会議での報告の中で、音韻論の観点から日本式ローマ字に肯定的に言及した。

これ等の実用綴字法構成に顕れたる音韻学の意義の模範的実例として現今日本に於ける国民的ローマ字綴り方を挙げる事ができる。日本語の地名、人名その他の単語を書き表はす為めに従来欧米人は日本語の音韻学方面に構ひなく、単にその声音を写すに過ぎざる(所謂ヘボン式なる)書き方を使っていた。所で今、日本人自身がその^{きゅうらい}舊来の国字の代りに実用的ローマ字書きを用ひんとするに方り音声模写のヘボン式は日本語の言語意識を表はすに採用され難き事を見出した。「ヘボン」式に於ける発音の或る特殊の差別——^{たとえ}仮令ばt, tsの如き——をも文字に書き表はす事は音韻学上不必要な事が分った。日本語に於てはt音は常にa o eの前にのみ起るに反してts音は常にu音の前にのみ起るのである。故にts音とt音は常に異った音に接して居て夫れ丈けでは決して意味の区別を生ずることはない。故にこれ等の音は日本語の言語意識に於て差別すべきでなく、実用綴字に於ては——丁度独逸語に於て、口蓋化のk音も軟口蓋化

のk音も同じ (k) 文字で表はされる如く —— 同一の (t) を以て表はさるべきものである (田中館 1931a).

田中館は、日仏会館でのこの講演に限らずことあるごとに、このトゥルベツコーイの発言、あるいはそこに表明された言語学の最新の動向に言及し、日本式ローマ字の科学的な正当性を示そうとする (田中館 1937b など).

田中館はさらに、こうした言語学の動向を、音声についての物理学的研究の結果とも結びつけた。そしてそれをもとに、日本語の言葉の成り立ち (音素の構成) は、日本式ローマ字によってのみ表わすことができると主張する。

それはこういう意味である。理化学研究所の田口卯三郎が、トーキー・フィルムの録音機を改良したものを用いて音声を解析した。たとえば、英語の単語Japan中のJa (ヂャ) をトーキー・フィルムに録音して、そのフィルムの濃淡縞を光度計で測定してグラフに描いてみると、グラフは三つの部分から成っている。そこで最初の第一の部分を墨で塗り潰して復音機にかけると「ヤ」と聞こえる。中間の第二の部分を塗り潰して復音機にかけると「ダ」と聞こえる。さらに、はじめの二つの部分を塗り潰して同様にすると「ア」と聞こえる。これらのことから、グラフ上の三つの部分が、それぞれ一つの音素D, Y, Aに対応していると考えることができる³³⁾。

よって「フィルム」に写された母音子音の音素を一字一字に相当するように切り離してこれを適当につぎ合わせて、任意な言葉を発音させることができるわけであります。この様に組み立てた言葉の綴り方は、今広く知れ渡って居る日本式と云ふ綴り方によってのみ行なはれるのであります。即ち「日本式は」一字一音素と云ふ正しい組立になっているからであります (田中館 1936, 73)。

田中館は次のような事実も指摘している。たとえば「あまつかぜ」を日本式ローマ字で“Amatukaze”と書き、これを後ろから“Ezakutama”すなわち「えざくたま」と読んで、トーキー・フィルムに録音する。次いで、フィルムを逆送りにして再生してみると、「あまつかぜ」と聞こえる。この事情は、日本式ローマ字によっては理解できるが、「あまつかぜ」を“Amatsukaze”と書くヘボン式では理解できない。

先に、科学者たちのあいだに、日本の科学水準への自信や、日本語への自信が高まってきたことを指摘した。その自信は、日本が「大国」になったという自負と無縁ではなかった。「[ヴェルサイユ]条約以来日本が大国になった」 (田中館 1926d, 18) と田中館は言う。そして彼は、日本式ローマ字がヘボン式ローマ字と対立するようになってきた経緯も、日本が「大国」となり日本語への自信を高めてきたという文脈の中で捉える。

日本式ローマ字は明治の初期に西周 寺尾壽等の諸先覚者に依て熱心に唱へられたけれ共、当時の無差別なる外人崇拜熱の抑圧で、其発展を阻害されて居たものが暫時国民の国語意識の自覚によって追々其足場を固め、今や世界の言語学者間に其正当なる事を認めらるに至ったものである (田中館 1930, 47)。

次のような発言の背景にも、この大国意識がある。

今回日本に於て開催された太平洋会議でも、何を喋って居るか分からない。東西互いに理解

をする為に、英語でやろうといふのは虫が好過ぎる話で、此方が英語でやる位なら、先方だって日本語を学んで使ふべしで、茲に初めて意が通ずるのである。・・・従ってローマ字論が出るのである。[つまり、障碍となる漢字を使わないでローマ字で書くから、辞書を引いて読みなさい、というわけである。] (田中館 1926c, 25)³⁴⁾

このように考える田中館にとって、英語一辺倒になることはもちろん、ヘボン式のように日本語を英語流に表記することも、とても認めがたいことであった。彼は、「自国の正字法に他国の音系を使ふのは植民地以外には余り見出されないものである」(田中館 1931b, 58)と憤慨する。ヘボン式ローマ字の旗手である化学者の桜井鋳二に対しては、「桜井博士のようなペラペラの英語に研ぎ上げる方が宜いか」(田中館 1926d, 19)と柳榆する。

田中館のこうした意識は、アメリカが今日のように勢力を得るに至っていない状況の中でのものであるとはいえ、また日本の「大国」意識に根差したものであるとはいえ、今日の「英語帝国主義批判」にも通ずる側面をもっていたといえよう(津田 1996; 鈴木 1995)³⁵⁾。

さらに日本語あるいは日本式ローマ字に対するこうした意識は、もう少し広い視野からみれば、国際連盟における「民族自決」に象徴されるような、世界各地におけるナショナリズムの興隆に対応するものでもあった³⁶⁾。

そして、日本式のローマ字は、かつての欧化思想にかわって国粹主義的思潮が強まるにつれ、ヘボン式に対し相対的に有利になっていった、という面がある。国粹主義的思潮は、やがてローマ字運動全体に対し、抑圧的な力として作用するようになる。なぜなら、ローマ字運動は、アルファベットという欧米の文字を使おうとするものだからである。しかし、国粹主義的な勢力がまださほど強大でない時点においては、その国粹主義的思潮が明らかに日本式ローマ字を後押しする力として作用した(少なくとも、ヘボン式か日本式かというローマ字運動内部での対立に則して見る限り)。

日本式の支持者たちは、我こそが日本語(国語)を大事にしている、と強調する。「日本式ローマ字の第一眼目は、日本語に適したローマ字を、日本語の音系に従い国語内容の機巧に適するように使ふ点にある」(田中館 1930, 50)というのである。こうした主張は、明らかに、国粹主義的思潮と共鳴しうる調音を含んでいた。

田中館の言う、「日本語に適したローマ字を、日本語の音系に従」って使うというのは、「日本語の日本語たる根本的構造」(田中館 1930, 51)を示すようにローマ字表記する、ということである。具体的には、五十音図のあ行、か行など各行の変化が、同一の子音+母音(a, i, u, e, o)の形で規則的に表わされることや³⁷⁾、音便変化が自然な形でローマ字表記の中に反映していることなどである。後者の具体例は、たとえば「日本では」が「日本じゃ」に変わるという音便変化が、「じゃ」に対する日本式の表記dyaには反映している(dewa→dya (ew→y))、という点である。ヘボン式では「じゃ」がjaと表記されるから、dewa→jaということになってしまう³⁸⁾。

また、「国語内容の機巧に適するように」使うとは、「遠い祖先から語り継ぎ聞き継ぎして永い間の歴史に漂って居る言霊」にしたがって、あるいは「内容を表はさんとする民族意識」に従って使うということである。何やら大層な言葉を使っているが、要するに、ローマ字を「日本化」し、日本語の音に「同化」して使うということである(田中館 1931b, 55-6)。中国からのものにしろ欧米からのものにしろ、外国の言葉を使う時は、語法を日本語にあわせ、発音も日本化して使ってきた。ローマ字も、同様に、日本語の国音に合わせて音値を替えて使うべきである、というのである。したがって、たとえば「ち」はtiと表記すればいいのであり、これをヘボン式のようにchiと表記するのは、英語の音値をそのまま日本語にあてはめたものであり適切ではない、ということになる³⁹⁾。

しかしながら、田中館には民族主義的な傾向だけが見られるわけではない。もう一方では、国際主

義ないし普遍主義ともいうべきものが見られる。漢字や仮名ではなくローマ字を使うという点について、「ローマ字は世界の文字である。何れの国の特有にも属するものでない」(田中館 1931b, 57)ことを強調するのである。これは、彼がメートル法を強く支持したことで軌を一にするものである。メートル法は、出発点はフランスにあるにせよ、今や万国共通の度量衡システムとして各国に受け入れられつつあった。そして田中館は、そのメートル法を導入し普及させるために、日本国内で、また日本の代表として国際度量衡委員会場で、大きな活躍をなした。科学者として、科学技術分野でのメートル法の重要性を十分に知っていたからにほかならない。

日本式ローマ字は“nationalistic”であるという批判が、ヘボン式ローマ字を支持する側からなされた。それに対し、日本式を擁護する側のある人物が、そうした批判をする者は日本式に科学的根拠があることを知らないのだ、という意見を田中館に書き送っている⁴⁰⁾。「科学」という「普遍的なもの」に依拠することで、日本式ローマ字の「普遍性」を言うのである。日本式ローマ字を主張するために、ことあるごとにトゥルベツコーイらによる言語学の動向に言及した田中館のことであるから、彼もこの意見に同感であっただろう。

こうして、田中館(や日本式ローマ字論者)は、ローマ字論においても、あるいはメートル法の問題においても、偏狭なナショナリズムに陥ることはなかった。

田中館はまた、国際連盟の知的協力委員会の日本代表としても活躍した。そして彼は、世界の文字を統一することで各国の相互理解が促進され、そのことが世界の平和に貢献することを強く願っていた(田中館 年不詳b)。

人々の二つの大きなグループ、表意文字である漢字を使う東洋の人たちと、表音文字であるローマ字を使う西洋の人たちとが、違った文字を使っているために、相互理解が妨げられ対立している(田中館 1933, 99)。

この現状を、文字の統一によって克服しようというのである。「今、世界は国際関係の立て直しにかかっている大切な時期である、これについて各国互いに国語を理解しあうために、文字の統一はさしあたりの必要である」(田中館 年不詳b)。

これらの発言は1932年夏のものである。この年の春から夏にかけてリットン調査団が日本と中国を訪れ、まもなく「国際連盟日華紛争調査委員会報告」(いわゆる「リットン報告書」)が提出されようとする時期であった。田中館の言うような、文字の統一による世界平和の達成がはたして実現可能であったかどうかは疑わしいが、田中館のローマ字論が、(日本国内における「国字問題」だけにとどまるものではなく)このような国際的視野をもったものでもあった、という点は押さえておく必要がある。

7. 戦時下から戦後にかけてのローマ字運動

1931年の満州事変を境に、国語国字問題は全般的に「鋭さを失いはじめた」(平井 1948, 256)。1936年5月には、仮名文字論者で『漢字廃止論』の著者でもあった平尾鉦三郎が文部大臣になるや、議会で、「今マデノ私ノ主張シテ居ツタコトハ未熟ノ点ガ非常ニ多イト考ヘマスカラ、再検討ヲ致ス」と言明せざるをえない窮地に追い込まれる、ということさえ起った(平井 1948, 257)。仮名文字論でさえこうであるから、「敵性の文字」を扱うローマ字論は、より大きな圧力にさらされた。田中館も、「敵愾心に燃え立つ余り、音素文字であるローマ字を敵性の文字と思ふのは全く誤解である・・・この誤解を解かふと思ひ立てここに筆を執」(田中館 1943a)られなければならない。

実際、少なからぬローマ字運動家が弾圧を受けた。たとえば、山形で小学校の教師をしていた斎藤

ひでかつ

秀一が、ローマ字運動とエスペラント運動などが理由で3回検挙され、30歳の若さで刑務所の中で命を絶った(大島・宮本 1974, 218-21)。また、1939年6月5日には、平井昌夫、鬼頭礼蔵らのローマ字論者が特高に検挙された(左翼ローマ字運動事件)。

しかしその一方で、ほそぼそながらも、ローマ字書きの本が出版され、日本のローマ字会やローマ字ひろめ会などの総会が開かれ、ローマ字の講習会が開かれていたことも事実である(田中館 年不詳c)。議会においても、ローマ字の教育ならびに使用をもっと盛んにすべきだと、田中館によって主張された(たとえば1941年の第76回帝国議会貴族院本会議において)。

田中館愛橋だけが、貴族院議員などとしての高い社会的身分ゆえに、あるいは「ローマ字運動の象徴」ともいべき存在であったがゆえに弾圧を受けずにすんだ、というわけでもないようである。ローマ字の団体は活動が続けることができたし、名もない市井の人たちが田中館との間でローマ字書きの書簡をやり取りしているといった事実が、ローマ字運動が全面的に弾圧の対象になったわけではない、ということを示している。また、田中館は1944年の1月に飛行機の研究に関する功績で朝日文化賞を受賞し、それを追って4月には文化勲章を受賞した。ローマ字運動の指導者であることが、文化勲章受賞の妨げにはならなかったのである。

この間、1937年9月21日に、内閣訓令第3号として、いわゆる訓令式ローマ字が公布された。「国語のローマ字綴方」の調査を目的に、文部大臣を会長として1930年に「臨時ローマ字調査会」が設置され、そこで検討が重ねられてきたのである。その訓令式は、主として日本式の綴り方に則り、ただ、ジとヂ(ziとdi)、ズとヅ(zuとdu)の区別を認めない点ではヘボン式に従うものであった。

この戦時下において、田中館らが日本語のローマ字書きを推進するために持ち出す論点は、基本的には前の時期のそれと同じである。特に新しい論点加わるわけではない。ただ、戦時下に見合ったヴァリエーションが奏でられる。

ローマ字を導入することによりもたらされる「教育の経済」は、かつては、一般的な「国力の増進」と結びつけて語られていた。しかし、戦局の展開とともに、もっと直接的な、戦時下ゆえの若年労働力の払底という緊急の問題と結びつけて語られるようになった。次のくだりがその一例である。

今大決戦を前にして各方面に於て有力な人物を多数速成する事は最大急務である。教育の内容を昂め乍ら年限を縮める手近な道は漢字制限、字画簡易化、仮名遣改良と共に訓令式ローマ字の使用である。・・・特に科学にはアラビア数字と同様にローマ字が必要だ(田中館 1943b)⁴¹⁾。

また、国際交流とローマ字という面でも、戦時下ゆえの特徴を認めることができる。もはや、日本の科学や文化を広く世界に広めるために、あるいは国際理解のために、外国人にも読めるローマ字で日本語を書く、という主張は影を潜める。海外侵略、植民地政策との関係で日本語教育が語られる時代となり、かわって、占領地で日本語を教え、大東亜共栄圏に日本語を進出させるためにローマ字を、という主張が多くなってくるのである。しかも、ヘボン式追放の主張も重ね合わされる。1937年に訓令式が制定され、日本式ローマ字の側では、ヘボン式追放のための「錦の御旗」を手に入れていたのである。こうして、田中館も翼賛政治会政務調査会委員として、軍政部当局への進言案のなかで次のように書く。

占領地原住民に国語を教えるに当り彼等の間に既に使い広まって居るローマ字を用るの効果的なは極めて明な事実である。・・・現に南方各地に於て仮名教育を主眼としながら「実際手段」としてローマ字を利用し居る実情なり。・・・

文部省は今年四月一日より中等学校教科書に残って居たヘボン式を一掃し完全に訓令式統一

に至った。

然るに若干の英語教員其の他特に英米と親密の關係にありし一部の人民は、猶ほ舊来の英語に準拠せるヘボン式に固執し之を復活せんと試み、新占領地に於て訓令式排斥の運動を見るは遺憾に堪えざる處なり。ヘボン式により発音を教へる如きは全く非科学的にして国音を歪曲するのみならず、斯くの如きは国論統一の最も緊要なる時期に当り、内は思想界の摩擦相克を助成し、外は新□民心の帰趨する處を惑はしめ、惹ては国威にまで煩を及ぼさんことを憂慮す(田中 鎭 1942)⁴²⁾。

「世界の建て直しに大手を振って日本語を持ち出し、日本精神を押し広めるには、どうしても国語を弘めなければならない。それには、国語国字の統制は文化事業の急務中の急務である」と田中鎭はいうのである⁴³⁾。

田中鎭は、たとえば1931年のある論考の中で、「民族意識はその縮小を警め国際協力の精神と共に之を養成すべきは何人も否むものはあるまい」と述べていた⁴⁴⁾。このように、田中鎭の主張、あるいは日本式ローマ字論者の主張は、もともと、民族主義的なものと国際主義的なものととの微妙なバランスの上に成り立っていた。したがって、時流によっては、ローマ字運動が民族主義的な動きに呑み込まれる(あるいは利用される)、という可能性がもともとあったと言えよう⁴⁵⁾。

とはいえ、ローマ字運動あるいは田中鎭が非合理的な主張に走るということとはなかった。たとえば1941年の『ローマ字の日本』8月号は、ドイツが、いわゆる亀の子文字にはドイツ精神が宿っているという声を圧してその廃止を決めたと紹介しながら、「日本でも日本精神が漢字に宿ってゐるといふ迷信が中々はびこって居りますが、itu目が醒めることでせうか」と書いている。田中鎭も、1944年の第84帝國議會で質問に立ち、自然界を探究するには科学精神、すなわち伝統や陋習に反抗する精神が必要であるとか、動力を開発することが肝要であり、そのために工業用の応用的研究ばかりでなく、ラジウムなどについての基礎研究や、ウラニウムから動力を取り出すなどの研究も必要だ、といった趣旨の、科学研究の一層の推進を求める発言を行なっている⁴⁶⁾。

もともと田中鎭は、現代社会の土台は自然科学であると確信し(田中鎭 1937a)、声高に叫ばれるようになってきた「精神教育」に批判的であった⁴⁷⁾。物質教育こそが大事で、それが自ずと精神教育になるのであり、孔子のいう「格物致知」も今日でいえば自然科学の研究を行なうことだと主張していた(田中鎭 1938, 116)。

第二次大戦直後のローマ字運動は、GHQの後押しもあり、戦前に比し順風の中を漕ぎ出すことが出来た⁴⁸⁾。1947年1月、文部省が「国民学校におけるローマ字教育実施要項」を決定し、同年の4月から、小学校と中学校でローマ字の授業(原則として4年生以上、1年を通じて40時間以上)が行なわれることになったのである。平井昌夫(1948)は、これを次のように評価している。

明治初年以來いくどとなく建議や請願をしても実現を見ることのできなかった初等教育におけるローマ字教育が、終戦後の教育民主化の波に乗って、ようやく実施されることになった。しかも、第二の鹿鳴館時代ともまで評される英語流行の時期に、英語のみか一般外国語の入門としてではなく、国語教育の徹底と国民の書記能力の向上を目的として実施される点に、国語国字問題への一歩として、大きな意義が認められる(平井 1948, 443)。

しかし、こうしてローマ字教育が公式に始まるとともに、ローマ字運動の中で科学者たちが特に活躍するということがなくなっていった。また、ローマ字運動自体も全般的に衰退をはじめ、今やロー

マ字運動があったことすら忘れ去られてしまっている。

8. 科学技術コミュニケーションへの示唆

本稿ではここまで、先行研究に比べはるかに広いパースペクティブのもとに、国語国字問題の歴史あるいはローマ字運動の歴史という枠組を超えて、ローマ字運動について、特にその中で科学者たちの言動にスポットライトをあてて詳細に検討してきた。

その結果、ローマ字主義者たちの主張・活動には、「二つの相反する要請を満たそうとする、苦渋の選択」という側面があったことが明らかになった。「二つの相反する要請」とは、「科学者として、海外の研究者たちとハンディキャップなしにコミュニケーションをとる」という要請と、「日本国民の間で、科学についてのコミュニケーションに障害が生じないようにする」(科学の学習・理解がスムーズに進むようにする)という要請である。

これら二つの要請は、一般には必ずしも「相反する」ものではない。ただ明治維新以降の日本の場合には、科学者も非専門家(庶民)も日本語を日常的に使う一方で、科学者コミュニティでの流通語がドイツ語や英語であったという歴史的事情のために、相反するものになってしまった。この「事情」を根本から変えることは、そう簡単でない。であるからこそ、日本語をやめて英語にする、仮名表記に変える、など様々な意見が出た。その中で「ローマ字主義」というのは、日本語という言語を堅持し、その表記のみ、世界で広く使われるローマ字(アルファベット)にするという、いわば「苦渋の選択」としての「折衷案」であったと捉えることができる。ローマ字表記の裏には、漢字で表記される用語が潜んでいる(たとえば“iden”というローマ字表記の裏には「遺伝」という漢字表記が潜んでいる、ないしは潜ませざるを得ない)という意味で、漢字かな混じり文という日本語表記に強く依存するものであった。

さて、この「相反する要請」を生む「事情」は、こんにちも変わっていない。いや、「事情」はますます深刻度を増しているとさえ言える。科学研究はますます国際化し、科学者たちが「自分たちの共通語」(現状では英語)でコミュニケーションをとる必要性がいや増している。その一方で、国民の科学リテラシーを高めていく必要性もいや増している。が、だからといって国民の言葉を、科学者たちにとっての共通語に転換していくなどということは現実的に不可能であろう(杉山 2005)。

しかもこの両者は、ますます切り離しがたく結びつくようになっている。サイエンス・カフェや、コンセンサス会議など科学技術への市民参加が進展するにつれ、専門家と市民(非専門家)との直接的な(あるいはコミュニケーターを介しての)コミュニケーションが、ますます求められている。また、「トランス・サイエンス的な問題」が増えているという事情もある(小林 2007; 科学技術コミュニケーター養成ユニット 2007)。

「トランス・サイエンス的な問題」とは「科学に問うことはできるが、科学だけで答えを出すことができない問題」であり、「科学だけで答えを出すことができない」のは何故かといえば、社会や文化などと複雑に絡み合う諸側面が含まれるからである。そして、「社会や文化などと複雑に絡み合う諸側面」は、科学者にとっての共通語だけではもはや語れない問題群である。したがって、科学者たちも結局は、庶民(非専門家)の日常言語(言語、用語、表記)を無視できないであろう⁴⁹⁾。

ローマ字運動の歴史を、旧来よりも広いパースペクティブで捉え返すことにより明らかになった「二つの相反する要請」は、このように今もなおいっそう強い形で存続している。したがって、科学技術コミュニケーションを考えるにあたっては、こうした問題が存在することに十分な配慮を払う必要があるということ、これが本稿での考察を通して得られる、科学技術コミュニケーションについての示唆である。

たとえば、「国際的な科学者を育てるために、小さいときから英語で科学教育をするべきだ」という

意見がある。こうした意見は、「二つの相反する要請」のうちのもう一方に、どう対応しようとするのであろうか。「二つの相反する要請」が存在することに配慮した、もっと丁寧な議論がなされるべきであろう。

また、科学技術をめぐるコミュニケーションの場で、「リスク」という語が頻繁に使われる。しかし、「risk」を「リスク」と言い換えているだけというのは、科学技術コミュニケーションの観点から見て適切なことであろうか。「二つの相反する要請」を何とか満たそうという、これまでの科学者たちが営々と繰り返してきた努力を、いとも安易に放棄してはいないだろうか。

“risk”を「リスク」と言うのは、“radio”を「ラジオ」と言って済ますのとは、いささか訳が違う。ラジオは具体的なものを指しているの、使用しているうちに両者の連合関係ができあがっていく。しかし「リスク」のような抽象的なものだと、そうはいかないだろう。だから、もし「リスク(の大きさ)」を、危険をもたらす確率と、障害の重篤度の積、という意味で使うのであれば、可能な限りその意味を表現した翻訳語を創出するべきではないだろうか。研究者どうしのコミュニケーションに目を向けている限りでは、「リスク」=専門分野の文献で読み書きする“risk”であり、何の問題もないだろう。しかし、非専門家集団の中で「リスク」という語を使うや、それは極めて曖昧模糊とした、捉え所のない言葉になってしまう。また、場合によっては「リスク(の大きさ)」が、上とは違った意味で(危険などをもたらす不確実性(の程度)といった意味で)用いられることがある。こうした違いも、それぞれが翻訳語に置き換えられていてこそ、非専門家にとってもその違いが目に残るようになり、円滑なコミュニケーションの基盤ができあがっていくことになる。

ここに一例としてあげた、翻訳語を創出していく地道な作業が必要ではないかという論点も、本稿で述べてきた「二つの相反する要請」を意識してこそ、はっきり浮き上がってくると言えよう。

謝辞

本稿を執筆するにあたっては、岩手県二戸市歴史民俗資料館に保管されている「田中館愛橘資料」を利用させていただいた。何かと便宜を図って下さった松浦明氏ならびに二戸市歴史民俗資料館に厚くお礼を申し上げます。また、図書の閲覧や研究論文の収集にあたっては、児玉陽子氏をはじめとする北海道大学理学部図書掛の皆様(1997年当時)に、たいへんお世話になりました。文献の Cuddy and Mansell (1994) は柿原泰氏に、中澤 (2006) と長谷川 (2006) は三上直之氏に教えていただきました。以上の方々に、厚くお礼を申し上げます。

注

- 1) 雑誌 *SAIENSU* 発刊の経緯などについては、梅棹 (1995) に記されている。
- 2) 本稿は、1997年秋に杉山 (1997) をもとに書き上げていた「科学者たちのローマ字運動」(未発表)を、科学技術コミュニケーションの観点から改稿したものである。
- 3) 田中館愛橘 (1856-1952) は日本人として最初期の物理学者。地磁気など地球物理学の分野で業績をあげるほか、航空機研究を推進したり万国度量衡会議常置委員を務めるなど科学行政の面でも活躍した。本稿の以下で詳述するように、日本式ローマ字の普及にも努めた。この田中館愛橘が遺した手稿・書簡などの多くが、岩手県二戸市にある二戸歴史民俗資料館に保管されており、資料番号が振られている。本稿ではその資料番号を使って「田中館愛橘資料 No.xxxx」のように記した。
- 4) 俗に森有礼は英語の採用とともに「日本語の廃止」も唱えたと言われるが、この点については慎重な考察が必要である。イ・ヨンスク (1996) の序章が、この点を詳細に論じている。
- 5) 本稿でのルビは、読みやすさを考えて杉山が振ったものであり、原文にはない。

- 6) 「國民ノ性質」が「襲踏ニ長シ模倣ニ巧ニシテ自ラ機軸ヲ出スニ短」であるし「人ノ長ヲ取テ我カ長トナス」のを憚る必要などない、と西はあくまでも明快である。なお西も、日本語そのものを放棄しようとは言わない。「人民ノ言語天性ニ本ツク 風土寒熱人種ノ源由相合シテ生ス必ス變スヘカラス」だからである。
- 7) 「かなのくわい」と「羅馬字会」の両方に名を連ねている者がいる。その背景には、外山正一が外山(1884b)や外山(1884c)で、かな運動とローマ字運動とが協力して共通の敵である漢字にあたることを訴えていたという事情もある。外山の「現実主義」は徹底していて、自分はローマ字主義者であるが、未だローマ字論者が少ないので、漢字を廃止させるといった目的のためにとりあえず仮名論を支持しているにすぎない、いずれローマ字論者が増えてくれればそちらを支持する、と述べている。
- 8) イ・ヨンスク(1996, 18)は、「すこぶる興味深い」として言及している。
- 9) 馬場は、カーペンター女史の著書から、インドでは上流階級と下層階級との間に大きな懸隔があり、上流階級のみが英語を通じて高度な文明を吸収するためにますますその懸隔が埋めがたくなっている、という指摘を引用しながら、英語を採用すると日本でも同様のことが起りかねないと危惧している(馬場 1987, 213-4)。
- 10) Cuddy and Mansell (1994)がインドにおける技術者教育の問題を扱っている。
- 11) 長谷川公一は、社会学という分野を対象にして、「母国語で学べる幸福」を指摘している(長谷川 2006)。
- 12) これは無署名の文であるが、仮名文字論者の松村任三によるものと考えられている。
- 13) なお、後代の長久保(1997, 184-91)は、松村任三の仮名論に対しきわめて否定的な評価を与えている。
- 14) 松村任三の弟子の本田正次が、「大学に入って先生から直接講義を聴く時でも、もちろんこのような大和言葉の術語で教わったものである」と回想している(木原・篠遠・磯野 1988, 181)。本田は1897年の生まれであるから、1910年代のことであろう。
- 15) 本稿の執筆にあたっては、国立国会図書館所蔵の清水(1874)を利用した。なお、清水卯三郎の生涯については、井上(1925)が参考になる。
- 16) もちろん、漢字制限がたえず試みられてきたことも大きい。
- 17) もちろん、田丸が試みた変更には、漢語の術語を除くという意図とともに、内容をより適切に表現した術語にするという意図も含まれていたと言えよう。たとえば、極性ベクトル、軸性ベクトルをそれぞれ Zengoseino Vektor, Kwaitenseino Vektorとしている場合には、後者の要素がより多く含まれているように思われる。なお、同書の索引の末尾に書き添えられているように、この書の用語のすべてが田丸本人によるものとは限らない。
- 18) なお、明治の最初期に清水卯三郎が化学入門書『ものわりのはしご』(清水 1874)のなかで大和言葉の化学用語を作って用いたことについては次のような評価がある。「当時一般には、似合いの漢字の結合による和製漢語が訳語として氾濫、そしてそれが今日のわれわれの困惑をも招いたのを思うと、清水の・・・造語法は風変わりな孤立的なものとして簡単に片づけきれないものがある。『ものわりのはしご』での特製の和語は、たしかに作り過ぎのきらいはあるが、もし清水のような心づかいを他の当時の洋学者一般がしていたなら、近代日本語の単語は、もっとやさしくわかりやすいものになっていたことであろう。」(山本 1965, 189)
- 19) 仮名運動のほうでも、山下芳太郎によって1920年に仮名文字協会が設立されるなどの動きがあり、字形の改良などが議論された。しかし仮名運動は筆者がこれまで調べた限りで、概してローマ字運動より低調であり、かつ、活発に活動した科学者もいないので、本稿ではこの時期

の仮名運動については触れない。

- 20) その主張は、翌1906年2月の『東洋学芸雑誌』に「日本式羅馬字」として発表された。また6月には、読売新聞誌上に「日本式羅馬字」が8回にわたって連載された。
- 21) 1909年7月に、図書出版のために「日本のローマ字社」(のち「日本のローマ字社」)が設立され(田中館愛橘・芳賀矢一・大河内正敏が相談役、田丸卓郎が事務指図役)、ローマ字ひろめ会のもとで1910年6月から発行していた*Romazi Sinbun* (1911年7月から*Romazi Sekai*)も1912年5月からは、日本のローマ字社の発行になった。田中館愛橘と田丸卓郎は、1912年4月にローマ字ひろめ会から脱会する。両派の対立の経緯などについては、たとえば平井(1948, 229 and 277-81)が詳しい。
- 22) 帝国ローマ字クラブの主張は、桜根(1939)にまとめられている
- 23) 「教育の経済」は、田丸(1914)の第4章第1節のタイトルでもある。
- 24) 1880年代には、活字印刷のために好都合だからローマ字表記を進めるべきだ、という主張がなされていた。その主張はこの時期にも繰り返されている。
- 25) 田丸卓郎が『ローマ字世界』第12巻10号(1922)に「日本式コロナの配列について」を発表している。
- 26) これは、自然科学者の中にエスペランティストを生み出す要因でもあった(大島・宮本 1974, 9)。
- 27) 田中館のこの主張は、たとえば次のような場合を想像してみれば、今日の我々でも理解できよう。朝鮮語をまったく知らない人が、ハングルを用いて朝鮮語で書かれた科学論文を見た時と、同じく朝鮮語ではあるがローマ字を用いて書かれた科学論文を見た時とを比べてみるのである。後者の場合のほうが、はるかに多くの内容を推測できるだろう。
- 28) このときの田中館の日本語に対するとらえ方は、田中克彦のいう「進出型言語」に通ずるものと言えよう(田中 1997)。
- 29) 第一次世界大戦後に、科学界で敗戦国のドイツを排除する動きが起きるが、それが「制裁」としての意味を持ちうるのも、科学研究における世界的ネットワークの重要性が高まっていたからこそであろう。
- 30) 『岩波数学辞典 第2版』岩波書店、1954 (第1刷)、1968 (第2刷)は見出しに日本式ローマ字を用いている。1985年の第3版からは、漢字仮名混じりの見出しに変わった。
- 31) 田中館愛橘個人についていえば、彼はヨーロッパでの国際会議に頻繁に出席し、フランス語、ドイツ語、イタリア語、そして英語などに接していた。
- 32) 1880年代の田中館が、音声学に関心を持ちながらも、それとローマ字表記法に関する自説とを結び付けていなかったのとは対照的である。音声学も音韻学も、この間に大きく発展したのである。なお、東京帝国大学博言学教授の上田万年が、西欧の近代言語学の受容を通して「国語」の理念を形成するとともに、ローマ字を支持する、という事情も示唆的である。イ・ヨンスク(1996)を参照のこと。
- 33) 日本式ローマ字では、ヂャを *dya* と表記する。
- 34) 田中館は次のようにも書いている。「なほ一言ここに置いて置きたいことはヨーロッパにゐられる安達大使が今度の太平洋学術会議に英語だけを用ひることに対して強い反対の意見を我帝国学士院に申し越されたことである。私が大使に御目にかかった時親しくきいたには「われわれ外交家が骨を折って日本語はヘーグの裁判所でも、国際連盟の会議でも使ふ事の出来るようにしたのに学者がそんな事をしては困る。それだから日本の学界が思ふように振はない」といはれたが、全く私も同感である。」(田中館 年不詳a)

- 35) 日本式ローマ字を主張する人たちは、日本人の名前の書き方についても、姓-名の順で書くことを主張した。田中館も、Thnakadate A. と書いている。
- 36) 20世紀は書き言葉の数が爆発的に増えた時代であるという。ナショナリズムの台頭を背景に、「国家」の誕生の目印として書き言葉が作り出されたのである (田中 1997, 6)。そして田中館も、「極めて弱小の民族すらも民族自決と云ふ資格を認められるやうになった。そして各民族に固有の国体、風俗、宗教と共に、或はそれらより已上に大切なものは国語そのものである。」 (田中館 1931b, 57)
- 37) 同じことであるが、動詞の活用語尾が規則的に表現される。「取る」も「押す」も、tor-i, tor-u, tor-e; os-i, os-u, os-e のように、活用語尾が -i, -u, -e で表わされる。ヘボン式ではこうはいかない。
- 38) さらに、ewがyに変わることも、e, w, yの間の音声学的な関係 (本居宣長の説) から理解できるとしている。
- 39) こうした主張の基礎には、ローマ字表記法は発音を正確に表現しようとするものではなく、「日本語の正字法を確立しようとする」ものであるべきだ、という理解がある。発音を正確に表わしたいのであれば発音記号を用いればよい、というのである。前に記した言語学の動向とも関連している。
- 40) 田中館愛橘宛の1936年10月10日付書簡 (差出人不明) (田中館愛橘資料 No.2770)。ここでいう科学的根拠とはトゥルベツコーイらによる言語学的な裏づけのことである。
- 41) 原文には太字で強調した箇所があるが、それは無視した。
- 42) □は判読できない文字。
- 43) 国際文化振興会がヘボン式ではなく訓令式を用いるよう指導して欲しいと述べている文書 (田中館愛橘資料 No.3317) もある。また、「東亜の共通語は日本語に、日本語は日本式ローマ字で」をスローガンとする「国定ローマ字ひろめ会」(下関市)に、祝詞を送り賛意を表明している (田中館愛橘資料Nos.4818, 4819)。
- 44) 田丸もかつて、「ローマ字論が社会に勢力を得るには、国学者を無視するわけに行かない。彼らの支持を得るには、日本式がいい。」という趣旨のことを述べていた。
- 45) 国語国字問題における「改革派」が「保守派」以上に文化的な対外侵略の推進派になっていくという構図は、保科孝一ら国語学者や国語政策担当者にも共通するものである (イ・ヨンスク 1996)。
- 46) 田中館愛橘, 第84帝国議会における質問 (1944年2月)。
- 47) 田中館は、1944年のいくつかの論文で、「科学(的)精神」を力説している。
- 48) この頃のローマ字運動については、Hada (1981) や Hardesty (1986) などの研究がある。
- 49) 社会学者の中澤は、本稿とはいささか違った観点から、“国際語＝英語で発信することと国際的に流通させることが必ずしも同じではない”ということを指摘している (中澤 2006)。また杉山 (2005) の77ページ以降も参照されたい。

●文献：

荒川清秀 1997:『近代日中学術用語の形成と伝播－地理学用語を中心に』白帝社

BABA Tatsui 1873: *An Elementary Grammar of the Japanese Language, with Easy Progressive Exercises*, Trübner & Co., 1873; 馬場 (1987) 第1巻に所収

馬場辰猪 1987:『馬場辰猪全集』岩波書店

Cuddy B. and Mansell T. 1994: "Engineers for India; The Royal Indian Engineering College at Cooper's Hill",

History of Education, 23, 107-23

福沢諭吉 1873:「文字之教端書」, 吉田・井之口(1950)に所収

Hada, J. J. 1981: "The Romaji Movement During the Allied Occupation of Japan (1945-1952)", A dissertation presented to the University of San Francisco.

萩原延壽 1967:『馬場辰猪』中央公論社

Hardesty, M. E. 1986: "Language, Culture, and Romaji Reform: A Communications Policy Failure of the Allied Occupation of Japan", A thesis submitted to the University of Minnesota.

長谷川公一 2006:「母国語で学べる幸福」『書斎の窓』4月号, 43-6.

橋本万平 1976:「物理学術語和英仏独対訳字書」『科学史研究』No.119, 122-32

平井昌夫 1948:『国語国字問題の歴史』昭森社, 1948

HIRAYAMA Kiyotsugu 1920: "New Asteroids belonging to the Families", *Nippon Sūgaku-Buturigakkawai Kiji*, Dai 3 Ki, Maki no 2, 236-40

池野成一郎 1913: *ZIKKEN-IDENEGAKU* ("RIGAKU" 3 no Maki) 日本のローマ字社

井上和雄 1925:「みづほ屋卯三郎」(上・中・下)『新葛時代』第1年第4冊, 49-54; 第5冊, 51-56; 第6冊, 49-56.

井上哲次郎 1894:「文字と教育の関係」(1894年4月の大学通俗講演会での講演), 吉田・井之口(1950)中巻に所収

イヴィッチ(早田輝洋・井上史雄共訳) 1974:『言語学の流れ』みすず書房

石原 純(編輯代表)1935:『理化学辞典』岩波書店

イ・ヨンスク 1996:『「国語」という思想』岩波書店

科学技術コミュニケーション養成ユニット 2007:『はじめよう! 科学技術コミュニケーション』ナカニシヤ出版

木原 均・篠遠喜入・磯野直秀 1988:『近代日本生物学者小伝』平河出版社

橋田広国 1992: *Nippon no Romaji-undo*, 日本ローマ字教育研究会

小林傳司 2007:『トランス・サイエンスの時代』NTT出版

前島 密 1873:「興国文廃漢字議」, 吉田・井之口(1950)に所収

前間孝則 1994:『YS11 国産旅客機を創った男たち』講談社

松村任三 1886:『植物学語抄』丸善商社蔵版

松村任三 1889:「何故ニ植物ノ漢名ヲ用フルヤ」『植物学雑誌』第28号, 230-1

MORI Arinori 1873: "Introduction to Education in Japan", 森(1972)第3巻に所収

森 有礼 1972:『森有禮全集』宣文堂書店

長久保片雲 1997:『世界的植物学者松村任三の生涯』暁印書館

西周 1874:「洋字ヲ以テ國語ヲ書スルノ論」, 吉田・井之口(1950)に所収

中澤秀雄 2006:「英語論文を書くということ(2)」, <http://nakazawa.exblog.jp/>

大島義夫・宮本正男 1974:『反体制エスペラント運動史』三省堂

長志珠絵 1995:「国家と国語 — 近代日本の政治文化」歴史学研究会編『資本主義は人をどう変えてきたか』東京大学出版会, 261-95

桜根孝之進 1913: *HIFUBYOGAKU*, 吐鳳堂書店

桜根孝之進(編輯)1939:『ローマ字論文集』帝国ローマ字クラブ

菅原国香・板倉聖宣「東京化学会における元素名の統一過程 — 元素の日本語名の成立過程(2) —」『科学史研究』No.175, 136-49

清水卯三郎 1874:『ものわりのはしご』みづほや

末松直次 1925: *SYOKUBUTU-BYOORIGAKU* ("RIGAKU" 5 no Maki) 日本のローマ字社

杉山滋郎 1997:「田中館愛橘とローマ字運動」『日本の近代化と科学技術 — 田中館愛橘の活動を事例に —』(平成7年度~平成8年度科学研究費補助金研究成果報告書, 1997), 3-28

杉山滋郎 2005:「科学コミュニケーション」『思想』5月号, 68-84

鈴木孝夫 1995:『日本語は国際語になりうるか』講談社

- 高木博志 1997:「田中館愛橘の戦時下のローマ字論」『日本の近代化と科学技術 — 田中館愛橘の活動を事例に —』(平成7年度～平成8年度 科学研究費補助金研究成果報告書, 1997), 29-35
- 田丸卓郎 1914:『ローマ字国字論』岩波書店
- 田丸卓郎 1922:「日本式コロナの配列について」『ローマ字世界』第12巻10号
- 田丸卓郎 1937: *RIKIGAKU*, 岩波書店
- 田中館愛橘 1885:「本会雑誌ヲ羅馬字ニテ発兌スルノ發議及ビ羅馬字用法意見」『理学協会雑誌』第16巻, 105-132; 田中館(1938, 3-18)に所収
- 田中館愛橘 1920:「国字問題としてのローマ字」『新時代』5月号.
- 田中館愛橘 1926a: 6月27日付の手紙(宛先人不明); 田中館愛橘資料 No.1953
- 田中館愛橘 1926b: 姫路ローマ字会世話人 Soga Sinsaku に宛てた10月19日付の手紙 (原文はローマ字); 田中館愛橘資料 No.1805
- 田中館愛橘 1926c:「みち草話」(1926年11月13日の講演), 『有終』1927年7月5日, 17-28
- 田中館愛橘 1926d:「汎太平洋学術会議の所感を述べて国字論に及ぶ」(1926年11月17日, 東京銀行倶楽部晩餐会での演説), 『銀行通信録』第82巻第491号, 17-20
- 田中館愛橘 1930:「日本式ローマ字は合理的なり」『学士会月報』第506号, 33-57; 田中館(1938, 47-54)に所収
- 田中館愛橘 1931a:「日本式ローマ字について」原文(ドイツ語)が田中館愛橘資料の中にある (No.2893)
- 田中館愛橘 1931b:「ローマ字正字法と国語内容の民族意識」『ローマ字世界』第21巻第1号, 3-11; 田中館(1938, 55-9)に所収
- 田中館愛橘 1933: “Kotosi no Tabi I”, 『学士会月報』第549号, 64-70; 田中館(1938, 94-100)に所収
- 田中館愛橘 1936:「音韻学上より見たる日本語の音声と正字法」(1936年4月28日, 日仏会館における講演); 田中館(1938)に所収
- 田中館愛橘 1937a: “Tamaru kun no Omoide” (田丸卓郎(1937)の序文); 田中館(1938, 65-70)に所収
- 田中館愛橘 1937b:「日本に於けるローマ字書きの発達及び正字法の制定」『学士会月報』第588号, 11-14; 田中館(1938, 103-10)に所収
- 田中館愛橘 1938:『葛の根』日本のローマ字社
- 田中館愛橘 1942:「占領地に於るローマ字使用法に関し進言」1942年8月6日付 (軍政部当局に進言されるよう, 翼賛政治会政務調査会文部委員会委員長の山川建に申し入れたもの), 田中館愛橘資料 No.1104
- 田中館愛橘 1943a:「時局と国語のローマ字書き」田中館愛橘資料 No.6431
- 田中館愛橘 1943b:「決戦時局と文字」田中館愛橘資料 No.6431
- 田中館愛橘 年不詳a:「学問と日本語(下) ローマ字書きの必要 第三回汎太平洋学術会議の思ひつき」, 田中館愛橘資料 No.4225
- 田中館愛橘 年不詳b:「講演原稿[国際諸会議報告]」(原文はローマ字), 田中館愛橘資料 No.2875
- 田中館愛橘 年不詳c: (タイトルなし) 田中館愛橘資料 No.4266
- 田中克彦 1997:「世界・日本・ローマ字」『国文学 解釈と鑑賞』1月号, 1-13
- 寺田寅彦 1913: *UMINO BUTURIGAKU* (“RIGAKU” 2 no Maki) 日本のローマ字社
- 寺田寅彦 1916: 田中館愛橘に宛てた12月13日付の手紙(原文はローマ字); 田中館愛橘資料 No.2032
- 外山正一 1884a:「漢字を廃し英語を熾に興すは今日の急務なり」『東洋学芸雑誌』第33号 (1884); 吉田・井之口(1964, 74-9)に所収
- 外山正一 1884b:「羅馬字を主張する者に告ぐ」『東洋学芸雑誌』第34号, 104-6
- 外山正一 1884c:「羅馬字会を起すの趣意」『東洋学芸雑誌』第39号, 228-33
- 津田幸男 1996:『侵略する英語 反撃する日本語』PHP研究所
- 辻哲夫 1977:「科学技術と近代日本語」『岩波講座 日本語 3 国語国字問題』岩波書店, 71-100
- 梅棹忠夫 1995:『わたしとローマ字』ローマ字文化をかんがえる会
- 山本正秀 1965:『近代文体発生の史的研究』岩波書店
- 矢田部良吉 1882:「羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ説」, 吉田・井之口(1950)上巻に所収
- YOSHIDA Haruyo and SUGIYAMA Shigeo 1997: “Aikitu Tanakadate and the Beginning of the Physical

Researches in Japan", *Historia Scientiarum*, 7-2, 93-105

吉田直哉 1992:『癌細胞はこう語った 私伝・吉田富三』文芸春秋

吉田澄夫・井之口有一(共編) 1950:『国字問題論集』富山房

吉田澄夫・井之口有一(編) 1964:『明治以降国語問題論集』風間書房

湯浅光朝 1961:『科学史』東洋経済新報社

湯川秀樹 1946:「私どもの使ふ言葉」『國語・國文』(京都帝国大学国文学会)第15卷第3・4号, 33